

第3回教育懇談会議事録

日時:平成24年10月2日(火) 15:00~17:00

場所:愛知県三の丸庁舎 アイリスルーム

<大村知事>

皆さん、こんにちは。本日は、大変お忙しい中、3回目の教育懇談会にご出席いただき、まことにありがとうございます。また、今回は特別参加という形で、愛知県私学協会の会長であります名古屋石田学園理事長の石田正城様と、これですとご参加いただいております、中核メンバーであります(笑)、江川さん、いかに愛知の教育に思い入れが深いかということかと思いますが。また辛口の意見をいただければと思います。ありがとうございます。

前回は、7月27日でしたが、「社会の成熟化に対応した愛知の中等教育のあり方」と題しまして、特色ある高等学校づくりや高校入試制度のあり方について、ご議論をいただきました。皆さんからいろいろなご意見をいただきましたが、こういったことを受けまして、9月12日には、教育委員会の方で、新たに「愛知県公立高等学校入学者選抜制度の改善に関する検討会議」を設置し、いろいろなご意見をお聞きしながら、入試制度についてのより詳細な検討をやっていただくことになっております。この会議の座長には、中野先生にお就きいただいておりますので、引き続きよろしく申し上げます。方向性が整理ができた段階で、この懇談会で報告いただきたいと思いますので、よろしく願いたいと思います。

さて、今日、3回目の懇談会の議題は、少子化時代に対応した公立、私立の教育のあり方についてでございます。

この懇談会でも既に話題となっておりますのでご存じのことと思いますが、この愛知県は一般的には公立志向が強いと言われておりますが、東京に比べますと、東京は私立学校が非常に多いので、それと比較するのはどうかと思いますが、いずれにいたしましても、公立・私立高校の役割について、どう考えるのがよいのかということについて、様々なご意見をお伺いできたらと考えております。

その上で、ちょうど今から20年、30年前、第2次ベビーブームの子どもたちがずっと増えていくという中で、できあがった制度が今もあるわけでございまして、これをどうしていくのがよいのかといったことも含めてお聞きしたいと考えております。

例えば、公立・私立高校の生徒の受入れにつきましては、愛知県の場合は、生徒急増期であった昭和56年に、公立・私立高校の生徒の受入比率を公立と私立で2:1に設定し、現在に至るまで、公私協調によりまして、その割合と申しますか、この枠組みの中で生徒の受け入れを行ってきたわけではありますが、最近、私学側に多くの欠

員が生じるなど、課題も顕在化してきております。

また、私学への助成に関しては、愛知県では、昭和63年度に、私学の経常的経費の2分の1を補助する、いわゆる愛知方式という助成制度を導入いたしまして、額的に言えば全国トップレベルの私学助成を実施してまいりました。この愛知方式も、私学が経費節減をすれば、補助金も減る、私学の経営改善へのインセンティブが働きにくいといった問題点も指摘されておまして、こうした制度も含めていろいろな意見をいただければと考えております。

いずれにいたしましても、愛知県だけではないと思いますが、公立と私立、それぞれ特色を出しながら、要は、子どもたちのために何が一番よいのかということを目指していくのが我々の方向だと思っておりますが、そうした目で、ご意見をいただければと思いますので、今日の会議が実りの多いものとなりますよう、お願いをいたしまして、冒頭のあいさつとさせていただきます。よろしく願いいたします。

[事務局から出席者紹介・資料確認]

<大村知事>

それでは、懇談会に入りたいと思います。議論に入ります前に、事務局の方で資料を準備しておりますので、現状と取組について簡潔に資料の説明をお願いします。

[事務局から資料説明]

<大村知事>

それでは、皆さんからご意見を伺っていききたいと思います。今回は、2回に分けて、前半は、これからの公立・私立高校が担うべき役割について、後半は、生徒の受入れや私学助成などの制度のあり方について、皆様から、それぞれご意見を伺っていききたいと思います。

まずは、前半のこれからの公立・私立高校が担うべき役割について、公立志向が強い本県の現状などを踏まえつつ、どう考えていくのがよいのか、大きな観点から、皆様のご意見を、ひとあたりお聞きしてまいりたいと思います。

それでは、まず名簿の順に、江口様からご意見をいただきたいと思っておりますので、よろしくをお願いします。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

今回の公立・私立のテーマというのは大変難しいですね。私も今回いろいろ勉強しましたが、なかなかどこをどう議論していけばよいか分からないというところがあ

ります。というのは、まずいろいろ考えなくてはいけない要素があるということ、それから、同じ私立でも、例えば学力レベルの差によって考え方が違うだろうし、名古屋市内にある学校なのか、郊外にあるのかということでも考え方が違うだろうし、あるいは特徴が打ち出せているかどうか、うちはスポーツでいくとか、うちは勉強でいくんだといったカラーが出せているところとそうでないところでも違うし、私立と言っても一括りにできない、議論としてそういう性質があると思います。

その中で、私が今日、最初に申し上げたいのは、私立も教育の担い手という部分では大変重要な役割を果たしてこられており、今後も果たしていただかなくてはならないということだと思います。今日、特別参加いただいております石田委員の資料をざっと読ませていただいて、県立の教育費負担が一人当たり90万円、私立が38万円です。3倍弱かかっている、事務局の資料でも、県立は2倍かかっているということなんですけれども、経済的な面から見ますと、おそらく保護者の負担を含めても、県立が担うよりも私立が担う方が、精緻な検証はできないんですが、私立に任せておいた方が合理性があると理解することができると思います。ただその割には、愛知県の教育の中での位置づけということで見ますと、私立は冷遇されているというのか、公立の滑り止めという位置づけが定着してしまっているというところが現実としてあると思います。本当であればそこを変えたいところではあるんですけど、保護者の立場から言うと、特に今は公立が無償化されてしまっていますから、実際、子どもが高校に行くとなると、ただで公立に行ける、私立だと何十万かお金がかかる、だったらお願いだから公立に行ってくれよというのはしょうがないことだと思いますし、長い歴史の中で公立優位が定着したが故に、進学実績がいい、進学実績がいいから社会の中でも公立の出身者が社会の重要なポスト、ポジションを占めているという現実がある中で、あえて私立を推すというためには、今の仕組みのまま何もしないのでは、その状況は変えられないだろうと思います。

そういう点で言いますと、事務局から出ているペーパーの中にもありましたけれども、大阪が一定の所得制限はあるにしても私立の無償化をやっている、公立と私立と同じ条件にして競わせて、お互い切磋琢磨しようというのは、考え方としては1つ参考になる気がします。ただ、愛知と大阪はもともと公立と私立の立ち位置が違いますし、大阪でやっていることをそのまま愛知県に持ってきてうまくいくかということ、そんな単純な話ではないとは思いますが、考え方としてはそういう方向が1つありうるのかなと思います。

例えば、私立と公立では学校施設の差が大きいですし、土曜日授業についても、私立の方がそこを売り物にして手厚くやっているところが多い。そうした公立に比べて手厚い部分は保護者の方にご負担いただいて、だけでも概ね費用の面では、そう公立と変わらない環境をつくってあげるというのは1つの方法だと思います。

あともう1つ、白石委員のペーパーの中で、低所得者層、教育困難層を私学が引き受けているのではないかと、そこも配慮しないといけないという記述があったと思うんですけど、愛知県の中で、完全にその層を私立が引き受けているのかどうかは分かりませんが、少なからずは私立が引き受けているという事実はあると思います。おそらく公立だって私学だって、本当は一番ボトムにある層を喜んでぜひ受け入れたいということはあまり考えにくくて、できればそのポジションから抜きたいなと思っているのではないのかなと思いますが、その部分をどこかの学校が引き受けなければならぬ、そうしたボトム層というのは、公立が担うような仕組みが必要ではないかと思えます。

いずれにいたしましても、このテーマというのは、前回の入試制度なんかよりもずっと難しく、議論になっている点だけをいじればいいという話ではなく、全体の中で議論を深めていかなければならないテーマだと思います。ですから大きな方向性としては、私は、私立は公立の下という位置づけを変えて、私立を引き上げていく形で公立とのバランスをとっていくのが望ましいという立場なんですけれども、長い時間をかけて、後半出てくる助成の問題も含めて、しっかりした議論ができる場で考えていくことが必要だと思います。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

まずは、東京、大阪との比較ということですが、私は東京、大阪との比較は必要はないのではないかと考えております。やはり比較するのは教育の質の問題であって、2対1がいいとか、公立の比率が多いとか少ないとかということではないと思っています。その結果として、有為な人材がどれくらい輩出できているのかとか、高校3年間でどれくらい生徒さんが伸びたか、そういったことを視点に考えるべきだと思っております。

それから、現状について、生徒さん、保護者を含めて、公立、私立の選択肢は十分用意されておりますので、現状を選択した結果、こういうことであるということあれば、それはそれでよい、結果についてよしという考えであります。

次に役割であります、やはり公立高校ということになりますと、ある程度、公立高校全体、県立高校全体を通しての均質性ということが期待されているので、私学について言えば、建学の精神を生かした独自の教育方針ということになると思いますが、あくまでそれは程度の問題だと思っております。県立だから均質性にこだわって特色を殺していいという意味ではありません。

それから、県立における均質性という問題ですが、各高校間でのレベルを均衡させるということを行っているのではなくて、これから社会に出て行く子どもたちのことを考えると、高校間であっても格差を受け入れて、格差があるという与えられた条件

の中で、自分たちの得意な分野をいかに見つけて、それを生かしていくか、こういう知恵がこれから重要になってまいりますので、均質だから高校のレベルも同じようにしなければいけない、そういうことではないと思います。

最後に、現状を見ると、私たち産業界から見ると、公私ともに相当数の高校で、基礎的な学力ですとか、社会常識が不足している声が非常に多いということです。この問題は、別の問題ではありますが、ぜひお考えいただきたいと思います。

それから、石田会長を前に大変僭越なんですけど、公立に良い人が行ってしまうということなんですけど、私は私学出身なんですけど、そういった公立高校に行ってしまう生徒を奪うというような、ぜひ気概をもってやっていただきたい、こういうふうに思っています。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

配られた資料の2頁目にございますように、公立学校と私立学校の役割が表向きに違いがあるとはいっても、先程の柴山委員と同じように程度の問題でありまして、公立学校が自主的な教育の特色を出してはいけないということもなければ、私立学校が教育委員会の指導・監督を全く受けないこともないわけです。しかし、費用は大きく違っているので、多くの受験生や親たちはこれを見ます。費用対効果で、もし私立学校の授業料がそれに見合うか、それ以上の効果があればいいのです。しかしながら、教育の特色が効果・成果に反映しにくいのが、今日の公私の問題を引き起こしている根っこのところにあるのではないかと思います。つまり進学を中心に考えている親や生徒は資料にあるような難関大学の合格者ランキングを見ているわけで、ここに私立学校が出ないということになると、私立学校に投資はしません。スポーツ選手をたくさん輩出すれば、大学進学志望者が集まるかということ、それだけでは無理だろうと思います。そこで今日、私がここで申し上げたいことは二つあります。

まず、資料の7頁目のところにありますけども、私立学校は名古屋地区の東部に集まっているということです。名古屋地区とそれ以外の地区はある程度ルールを分けて考えるべきではないか。特に名古屋市地区以外では、公立学校が特色のある教育プログラムとか、それに代わるものを打ち出していく必要がある。愛知県をひとくくりにして議論するのはやめましょうということが一つです。

もう一つは、教育の特色が成果に反映しにくい、時間がかかるということがあるので、少なくとも今の小学生ぐらいが大人になって、自分の子供に進学を勧める時には、私学もいいよと言われるような、20年後から30年後ぐらい先の長いスパンで考えていかなければいけないだろうということです。今の大学生前後の子たちが大人になって、自分の子どもに私学を勧めるというのはたぶん無理。価値観が蓄積されてしまっているので、次の時代を見込んだ長期的な計画がいるだろう、この二点を申し上げて

おきたいと思います。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

ずっと私も愛知県の教育に関わってきましたけど、確かに公立志向というのは、ずっと昔から愛知県全体の、安定志向と関わっていると思うのですけども。またよく言われていますけど、県内からなかなか出ていかないという話があります。

これはずっと培ってきた風土であります。その中で、公立と私立がどういうふうに棲み分けができるのかどうかです。例えば、高校がどういう状況にあるかということを考えてみますと、前から申し上げていたのですけど、とにかく大学に入っていく、入りやすくなった。高校生が勉強しなくなってきている。今は、3割の生徒は全然学校以外は勉強しないということが起こっているのだそうですけど。そうなりますと、とにかく高校時代にどういうふうに将来の希望をもってやれるかということをやっておかないといけないと思います。

そこで、公立、私立といったときに、愛知では、公立も長い間かかっていろいろ多様化を図ってきたと思うんです。総合学科とか。私学は私学でそれぞれの特徴を出すために、スポーツであり、いろんなことをやってきた。ただ、資料にもあるように組織的には私学の方が変わったのが少ない。本来的には私学はもっとフットワークよくできるはずなんですよね。生徒たちが、公立に行くか私立に行くかということ、どこで判断するかです。公立でもいろんな公立間の格差もあるわけです。私学もいろいろあると聞いています。

今この少子化の中で、このままこれだけの学校をこの人数で維持していくというのはなかなか大変なことだろうと思うんです。だから学校も、例えば定員を減らすということじゃなくて、学校の規模を縮小するなら特徴をもって縮小する。あるいは、変化させながら特徴を持たせていく。それは公立でもこれからもっと進めるべきでしょうし、私学は私学なりのフットワークをもって、やはりいろいろやっていくことが、ある面で棲み分けになっていくのかなという感じはします。

生徒にかかる費用、例えば教員の給与から全部含めて1年間に生徒にかかる経費が、公立と私学ではどれくらい違うかということ、実は計算できるはずなんです。本来的に、公立ももう少し支えていかないと。今のままで教育環境だとか下がってきますと、ますます子供もやる気がなくなってくると思います。そこへの手当、全体の人数と学校の数などを考えながら、はっきり言えば、統合も考えながら特徴を出していくことも考えていくべきだと思います。公立は公立で、私学は私学でやはりフットワークを活かしながらやっていくことを訴えていくべきです。

そしてもう一つは、いつも言いますが、高校時代に、その先のことがどう見えるかということで、決まってくるんです。例えば大学とか、その将来の先をどう考えて

いくつかで選択が決まってくる面もあると思います。そこは双方がアピールをし、その特徴を出していきながら競争していかないと、なかなか愛知県全体の教育は上がらないじゃないかということです。そういう全般的なことをございますけど。

<愛知教育大学学長 松田正久氏>

今日は、愛知の高校教育の課題、特に公立、私立の役割あるいはその分担等のあり方が課題ですが、まずは、全体として、10年前あるいは20年前に比べて状況は大きく変わってきているということを確認しておきたい。少子化の影響自身は、愛知県はまだ顕在化はしていませんが、今日の石田委員の資料なんかを見ますと、これからかなり減っていくような数値が出ております。近い将来20%、30%の15歳人口減が起きるわけですね。

そういう中でどうするかというお話だと思いますが、愛知県はさっきから出ていますように、高校は公立優先、大学は国公立優先というおかげで、愛知教育大学も交通は決して便利ではないところにあります。定員充足はしております。そういう中で、高等学校だけの問題ではなく、愛知県はご存じのように、この春の大学進学率も全国平均は4大で52、53%ですか。それが愛知県内では63%になっているんじゃないでしょうか。それから県内を卒業した高校生の県内への大学進学率が全国で一番高い県です。73%が県内の大学に来られる。公立依存であると同時に地元依存が非常に高い県であります。第2位は北海道の69%だと思います。そういう意味で言えば、公立優先というよりむしろ地元志向というのが大変強い、その中での公立、私立の役割をどうするかという話だと、もう一方で捉えております。

そういう中で、どういうふうに対応していくかということですが、僕は国立あるいは公立については憲法で保障されている教育の機会の均等を守るという役割を担っています。できるだけ家計負担を減らして公教育を保障していくという役割が基本的にはあるわけで、そのことをトータルに考えてやる。私学は私学でお話がありましたように、建学の精神に基づいて、小学校から大学までの一貫した教育をやられておりますし、そういう意味で言えば、制度としてかなりの部分が大学まで行けるといふような余裕の中で、伸びしろをもった生徒あるいは学生を育てられる余地があります。建学の精神に基づいた特徴をもった学生さん、あるいは生徒さんを育てていくところをもっともっとお出しになった方がいいのではないかと。今はスポーツだけが出ておりますが、これ国際化への対応ですとか、グローバル化への対応ですとか、公立では足りない先進的な試みは私学でやれるわけですから、そういう意味での存在感を一つ一つ発揮されてやるという角度も大事なのかなというふうに思います。

もちろん公立の場合も単に大学の進学率等々だけではなくて、東大あるいは名大の進学率だけではなくて、それぞれの地域に設置されている高校としての特色ある教育

を行い、トータルに人間形成としてどういう特徴を出してやられているのかということ。もう一つはやっぱり愛知県は相対的に職業高校の比率が高い件でありますけれども、その職業科の見直し等々も、時代に即してやられた方がいいのかなというふうに思います。例えば看護学科というのがありますが、ほとんど今4年制大学で養成されていますね。なお高校でもそれがいるのかという話も含めて、少し議論をされたらいかがなのかなというふうな気がします。

これから時代がどんどん変わっていくわけで、その中で高校教育のみの視点だけではなくて、高校から接続して大学教育をどうするかということで、今県と協力しながら、いろんな仕掛けを大学自身も愛知学長懇話会でやっておりますが、そういうところの連携を深める中で、高校教育をどう変えていくのかということの議論がトータルにやればいいのかというふうなことを感じとして持っております。

<漫画家 江川達也氏>

僕は大学で愛知教育大学に入って、ほとんどの学生が教師になるという大学で4年間過ごして、公立の中学校で半年ぐらい数学を教えていたんですけど、その後、東京に行って漫画家になったんですけど、学校関係の人たちを見てると、全然やる気ないようにしか見えなくて、普通の仕事に就くと、特にフリーの仕事をする、過酷な中を闘っていかなくちゃいけないわけで、それと比べるとなんと教育界というのは生ぬるい生き様をしているのかということを実感いたしました。

公立私立ともに、別にどちらから始めてもいいんですけど、もっと教育に対して危機感をもって新しいことを始めていかなくちゃなと思います。やっぱりさっき柴山さんがおっしゃったように、社会に出て役に立たない人間が増えていると、端的に言えばね。そういう状況で、学校が本当に役に立つ教育をやっているのかどうか。それが一番の疑問点というか、俺に言わせると、役に立たないことばかりやって、私学にしても公立にしてもダラダラやっているだけなんで、もうちょっと私立ならば、結局公立でやるというところで問題になることでも、私立だと自由にやっていますということで、大胆なことができるわけですね。そういう大胆なことをやればいいのか、なかなかぬるい感じ。

それで、入ってくる人は、僕自身の子供は高校生なんで大体分かるんですけど、上に大学があるからいいやとか、高いけどスポーツで入ってくるとか、そういうところに入ってくるわけで、そうじゃなくて、大学も含めてもっと教育を変えなくちゃいけないと思うんですね。どういうことを教えるのか、システムじゃなくて、どういう内容をどう教えるかというほうが論点になると思うんだけど、3回ここに参加させていただいたんですけど、何をどう教えるという一番大事なことを全然議論されていないような気がするんですね。だから、次からの議題はぜひ何をどう教えるということ

を中心にお願いしたいなというのがあります。

この間、「TVタックル」に出た時に、韓国の教育事情、特に独島ですか、竹島のことにに関して、韓国は全く歴史を間違えて教えていますけど、韓国側に有利な歴史をマインドコントロールしているわけですよ。それは日本の教育ではやってはいけないことなんだけど、それに中国も最近問題になってますけど、近現代において向こうが言っている内容が全く違うということをはっきり胸を張って言える日本人がどれだけいるのか。要するに近現代史はほとんど勉強しないわけですよ。近現代史を勉強することによって、現代をどう生きていったらいいかということがはっきり分かるにも関わらず、ほとんどの高校、中学で近現代史をちゃんと教えていない。それに対してなんとも思っていないくて、システムを変えとかそういうようなことを議論しても無駄なんじゃないかな。あとは歴史ですけど、数学にしても物理、科学にしても、科学史とかそういうものも教えない。だから教える内容をざっくり変えていくという方向性でいけば、私学がもっとやる気になってくれれば、独特の授業とか、独特の学校風土によって、新しく変わっていけるんじゃないかなと思います。

そういう意味で、逆に塾の先生の方が一番真面目にやっているような気がします。たぶん塾の講師というのは、人気ないとクビになってしまうんで、仕方なく一生懸命やるし、あとは若い人に聞くと、近現代史についてよく教えてくれたのは塾の先生らしいんですよ。何でかって言うと、塾の先生は人気さえあれば何を教えてもいいわけですよ。だから人気があって十分受験生を合格させれば、日本においてタブーとなっている勉強も教師としての魂で、試験に出なくてもみんなに教えたいというので教えている。それが一番教師として生き生きした姿だなと思うんで、私立も助成金でぬくぬくやっているぐらいだったら、もっと河合塾を見習ってですね、ダメな先生はすぐクビにするぐらいの競争原理ぐらいの学校運営をすれば、きっと本当に子どもたちを教えたい人達が集まってくる。

だからいいお金を与えて、環境をよくすればいい人が集まるというのは全くの嘘で、実際に真反対。というのは、実際には漫画界というのは、給料悪くても一生懸命働いている人っていうのは、好きだから集まってくるわけで、給料よくすると好きでもない奴が集まってくるわけですよ。だいたい先生っていうのは、安定しているからって言って集まってくる人が多いんですけど、本当に子どもたちを教えたい人は、たぶん条件を悪くするとすぐに集まってくると思います。むしろ条件を悪くして本当にやる気がある人がタブーなく教育ができるっていう形を私学の方でつくれば、公立よりもよっぽどいい教育が成り立つんじゃないかと。だから、河合塾が半分なんか学校になって、新しい高校とかつくってくれれば面白いと思いますけど。それはどうなんですかね、河合塾さん。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

そういう構想ももっているのは事実です。

<漫画家 江川達也氏>

そうですね、なるほど。私立は本当に受験校だと中高一貫で、うちの上の子は高校生から入ったんですけど、中学校3年のうちに、もう高校1年ぐらい終わってて、高校から入ってきた人はびっくりして、高校1年は別々のクラスなんですけど、だいたい高校2年ぐらいには勉強を終わらせて、高校3年はもっぱら受験勉強をしているという状況なんで、普通に公立で普通のカリキュラムでいくと、高校3年までに高校3年までのカリキュラムをやって、受験に向かう人とは全然違うスピードになっちゃうわけで、本当に私学で受験を目指すんだったら、高校1年ぐらいで高校3年までを終わらせて、あと2年間受験勉強させれば、まあ大学には受かりますけど、それがいい教育かは分かりませんが、それぐらい私立がざっくり違ったことをやった方がいいと思います。

<学校法人名古屋石田学園理事長 石田正城氏>

この会の第1回、第2回の議事録に目を通させていただきました。特に複合選抜制度の見直し、こういうことから始まったように思っておりますけれど、このことは、また後ほどお話をさせていただきたいと思います。

まず、公私の役割ということでございますので、私学を代表して意見を述べさせていただきます。皆様記録するのが面倒だと思って、レジュメを作ってまいりましたけれども、そういう関係で1番、2番、4番のところを少しかいつまんで説明をさせていただきます。

そこに、今回のロンドンオリンピックのことを書かせていただきましたが、愛知の私学から多くの選手が出場し大活躍をいたしました。日本を非常に元気にしてくれたと自負をしております。その中で2名の高校生もいるわけでありまして。1県からこれだけのオリンピック選手が出るというのは初めてではないかと思っておりますけれども、過去にも伊藤みどりさんとか、あるいは寺尾選手とか浅田真央さんとか、そういう選手も出ておりますし、あのイチロー選手も私立学校の出身であります。愛知県にはそういう私学にこれだけ素晴らしいアスリートを育てる土壌がある。オリンピックだけでなく、今国体もやっておりますけれども、高校総体だとかいろいろなスポーツの祭典で私学生徒の活躍はめざましいものがあると思っております。こういうスポーツを通じて、また私立学校の多様性の指導をもって、人との絆、人間形成にこれからも努めていきたいと思っておりますし、また行政からも温かい御支援をいただきたいと思っております。

私立学校がこういうスポーツに力を入れているというのは、人間形成、そこらへんを推し量ってですね、もう少し忍耐力のある、あるいは体力のある、あるいはスポーツというのはチームプレーなんかですと、いわゆるそのチームでの協調性、和、こういうのがないと勝てないわけでありまして、そういうことを養っている、人格形成をしている。ただ単にスポーツを強くして売名行為ということではなくて、人格形成に力を入れている、こういうふうに御理解をいただきたいと思っております。

2番目には、先ほど御説明のありました愛知の公立、私立高校の現状と取組、この中にも出ておりましたけれども、現在、高等学校は55校、約6万人の生徒の公教育を担っております。やはり、子どもが一番問題にするのは学校の経営のことでありまして、公私それぞれ役割はありますけれども、同じ土俵に立って競争をしていきたい。毎年中学校を卒業してくる生徒が、経済状況や家庭環境、学力といった制約によって、その進路選択の自由が奪われないようにすることが重要だと考えております。

そういう意味で、今年の8月の中央教育審議会の経過報告で格差の再生等の払拭ということが議論されましたので、ちょっと読んでみますが、「経済状況や家庭環境等による進学機会や学力等の差が、その後の就労・賃金等の格差にもつながる。世代をまたがる格差再生産、固定化された社会的連帯の保持が困難になる恐れがある。そういうことを防ぐためには、幼少期、学齢期など早期の段階における対応が重要であることから、家庭の経済状況や子どもの学力等に応じて経済的支援や学習面・生活面における支援などを適正に講じる。」と言われておりますけれども、当県でもいろいろな場でこういうことが議論されているところであります。そういう観点から、子どもも私立だけでということではなくて、同じ愛知県民として、公私が協力しあって育てていくと、こういうことは常に念頭に置いているつもりであります。

今日の資料の中の最初のところにもございました公立と私学の違いであります、はっきり言ってしまえば、公立は公平・平等だと。私立学校は自由だと。そしてさらに公立は統一的と申しましょうか、教育の普及、普遍教育をしていく。私立学校は多様性の中で自主独立の教育をしていく、こういうことであろうと思っております。今日のいろいろな資料の3ページあたりでも、公立のウェートが高いだとか、あるいは14ページくらいに伝統的な公立志向だとか、まあ、これは先ほど他の委員からもお話がありましたけれども、歴史的なこともありますけれども、そういう官尊民卑の土壌を、こういう形を作ってきた、こういうことも、少し考えていかなきゃいけないんじゃないだろうかと。また、遡れば古くなりますけれど、私立学校は公立の補完、あるいは生徒が多くなってきたときの調整機関だと、こういうような認識があったのではないかと、こんなことも起因しているのではないかなと思っております。

4番のところにも公費支出の公私間格差ということを書きましたけれども、何度も言っておりますように、公立も私立も同じ県民でありまして、是非ですね、この税金の

公平使用ということをお考えいただきたいと思っております。まあ、差がどのくらいあるかということについては、それをご覧いただければ良いわけでありましてけれども、ただ、平成23年度の当県の経常費補助金というのは、全国順位で見ますと40番という極めて低いところにあるわけでありまして。直接補助の金額が多いということから総合的には上位になっているわけでありましてけれども、ここら辺が一番大きな問題ではないかなと思っております。

今日は教育関係の先生方が多いわけで、平成18年の11月か12月でしたか、教育基本法が60年振りに改定をされました。第8条に私立学校のことが出ておりますけれども、教育基本法に私立学校という文字が出たのは、初めてのことで非常に私もはうれしく思ったわけでありましてけれども、8条には、「私立学校の有する公の性質、及び学校教育において果たす重要な役割に鑑み、国及び地方公共団体はその自主性を尊重しつつ、助成その他の適正な方法によって私立学校の振興に努力しなければならない。」そういう意味で補助金はいただいておりますけれども、本当に教育力の向上と経営の安定、こういうところへ持って行っていただきまして、本当に公立と私立が同じ土俵で切磋琢磨をしていくと、こういうことに早くしていただきたいなというふうに思っております。

今日は中野先生もおみえでありますけれども、先般、県が作りました「アクションプランⅡ」ですね、教育振興計画。これも教育基本法の第17条第2項からだと思っておりますけれども、100ページくらいのものでありますけれども、私立学校のことは1ページ。しかも事前に協議はなくて、できあがった頃にパブリックコメントで意見を求められました。私もだいたい書いたんですが、全然変更なくして発表がされました。やはり公立だけが良くなると、こういうことではなくて、公私が良くなって初めて県民の教育がなされるわけでありまして、今後はそういう意味においても、ひとつ私立学校の意見を十分お認めをいただきたいというふうに思っております。

また、後ほどそういうようなことがなぜ起こってきているのかということをおし上げていきたいと思っておりますが、とりあえず前半の御意見にさせていただきます。

<大村知事>

ありがとうございました。この前半の公立と私立の役割について、まださらに追加の御意見などがあれば、いかがでございましょうか。

それでは、便宜上論点を2つに分けましたが、後半の公立・私立の生徒の受入れや私学助成のあり方など、今後の少子化といった大きな時代の流れを踏まえどうあるべきかについて、これもまた委員の皆様から御意見をいただきたいと思っております。

後ほど、またフリーディスカッション、時間あると思っておりますので、十分やっつけていければと思っております。

それでは、先ほどとは逆回りということにできればと思いますので、まず、石田理事長から続けてお願いをいたしたいと思います。

<学校法人名古屋石田学園理事長 石田正城氏>

それでは、3番に特に複合選抜制度について書かさせていただいております。これはもう御承知のように全国に先駆けて、確か昭和60年頃提議がされました。そして私ども私学も随分意見を申し上げたわけですが、最終的なものは昭和63年の1月頃だったかと思いますが、2日間にわたって喧々諤々の議論がされて、倉知先生が議長だったときで、議長斡旋という、こういうことで決まってきたわけでありまして。

私も当時は校長としてこの件に携わっておりましたけれども、なぜ私立学校がこの制度に反対をしたかと言いますと、必ず公私間での偏差値の格差、あるいは序列化が従来より一層拡大をしてくる。こういう懸念が強かったわけでありまして。いろいろありましたけれども、現状ですね、知事さんが今回提案されましたように驚くほどの偏差値の格差、序列化が進んでいる。こういうように私どもは見ております。

確かに何回も試験を受けられる、そういう機会は必要でありましようけれども、現行制度は、公立が成績で丁寧に振り分けているわけですね。成績上位者のみをすくい取る制度で、私学入学者の3分の1は公立の不合格生徒の受け皿、こういう意識が一層進んで受け止められております。推薦入試は、学力だけで評価せずに特色を打ち出そうとする私学にとって最大の武器でありまして、学校を支える生命線でもありますけれども、公立の推薦拡大によって著しく侵されております。今、公立の推薦入試で約1万人が入っております。平成24年度の実績で普通科が4,592人、専門学科が5,577人の生徒がいるわけで、なぜこんなことをしなきゃいけないんだろうかと。そもそも推薦入試制度っていうのは、学校教育法施行規則で言えば特例扱いなんですね。特に学力を課さなくても入れていくと。こういうことでもありますけれども、1万人というのは4人に1人は推薦入試で入学をしている、こういうことなんですね。特例ではないわけでありまして。ですからもう他県では、確か熊本県や埼玉県では推薦入試制度はなくなっておりますし、東京でも随分議論になっているところですね。公立の入試の公平性ということから、一本化すべきじゃないか。こういう方向にあるわけでありまして。

先般、私ども私立学校が独自に行いました入試制度の調査を今日の資料に載せさせていただきましたけれども、複合選抜制については、91%強が問題ありと回答をしているわけでありまして、当初から私どもがこの制度を受け入れることに危惧をし、反対をしていたわけでありまして。学力の低い生徒を受け入れて教育をする。これは大変な努力がいるわけで、先生方も十分このことは御承知だと思いますけれども、今その役割を愛知県では私学が担っている。先ほども申し上げましたけれども、公立の補完

的役割、これでいいんだろうかと疑問を持っているところでもあります。

さらに追い打ちをかけますように、公立の無償化ということですね。先ほど、これからの高等学校教育はなんだろうと、義務教育なのかなんだろうかということもちょっと出ておりましたけれども、文部科学省の公立高校授業料無償化の主旨はですね、家庭の状況にかかわらず、全ての意思ある高校生等が安心して勉学に打ち込める社会を作るため、高校へ入りたいという意思があれば、能力がなくても入れていくんだ。それは今定通制も含めて98%の子が高校へ入学しているわけでありまして。そういう実態から見て、入りたいという意思があれば入れてあげるんだ。そういうことになりますと、やっぱりそういう生徒たちは、公立の役割としてまず最優先に入学をさせていく必要があるのではないかなと思っております。

現状の複合選抜制、先ほど申しましたように、ずっとふるいにかけて、一番下の不合格者を私学が受け持つと、こういうことではなくて、この際、積極的にそういう学力不足の者、あるいは不登校の者、それから経済的弱者と申しましょか、あの複合選抜制がいろいろ問題になって、同意をした時にも、経済的に恵まれない生徒たちを公立が引き受けると、今「環境推薦」と呼んでおりますけれども、これを5%採ると、こういう約束であります。実質的にはずっと1.7~1.8%しか採っていないと。誰でもが高校へ行く時代ということになれば、公立の役割として、そういう不登校の生徒、あるいは経済的に恵まれない生徒、私学に来れば授業料が無料と言っても、まだその他に数万円かかるわけでありまして、そういう生徒を最優先に入れていく。それから98%にもなれば、当然学力不足、学力の低い者もいるわけですから、そういう生徒も再教育をしていく。そういうことが公立に掲げられた使命ではないかなというように思っているところでもあります。少なくとも、そういう生徒たちを入学させていくという公立の役割をひとつ果たしていただきたい。是非今回の懇談会でも、この点は実現に向けて議論をしていただきたいというように思っております。実際、数字を今お示しする資料を持っていませんけれども、公立無償化の制度ができてから、私立学校に、いわゆる非常に低所得者ですね、金額で言うと250万円以下の収入の子弟たちが12%くらい入ってきていますね。かえって増えてきている。こういうような現状もありまして、今7千人くらい私立学校はそういう生徒を受け入れている。一方公立は1.7%という数字でございますので、そこら辺のところも是非是非お考えをいただきたいというふうに思っております。

少し長くなりましたけれども、複合選抜制が私学にもたらす色々な問題点として挙げさせていただきました。

<漫画家 江川達也氏>

今、石田さんのお話を伺わせてもらったんですけど、逆に成績が悪い人っていうの

が集まるっていうのは、実は普通に今の日本のヒエラルキーから考えると、マイナスだと思うんですけど、実はそういう人たちが集まるっていうのをプラスに転化できるんじゃないかと思うんですよね。

なぜかって言うと、成績上位者っていうのはある意味なんかちょっと欠陥がある人が多いんですよ。言ってしまうと。うちの近所に東京大学っていう大学があるんですけど、その学生が歩いているんですけど、本当に交通マナー悪いんですよ。あとは今の西洋合理主義的な学問の捉え方からいくと、なんか社会に出て本当に役に立つものを持っていない人が学力上位者になるような傾向があるんじゃないかと。要は数学ができる人の半分くらいがちょっとおかしいんですけど、やっぱりなんかある部分、妄想の世界に入っちゃって、現実を見えないような人が多い。逆に成績が下位の人たちの中には、今の学問のヒエラルキーの中にはない素晴らしい才能があると俺は思うんです。

実際に漫画とか描かせたりとか、ダンスを躍らせるとか。最近ダンス流行っているんですけど、イギリスかどこかの教育学者が今までの従来の学問じゃない自分を表現するっていうダンスを取り入れた学習をしたら、今まで自分の能力を発揮できなかった人が発揮するようになるとか、そういうふうに成績下位者の中に、というかみんな素晴らしい才能を持っているわけで、今までの従来の学問っていうカテゴリーじゃない、パラダイムじゃない部分を私学の方が強調して進めていけば、それがすごいプラスになるんじゃないかと。社会に出て、社会を下で支えている人たちで、良い大学を出ていない人たちが日本の今までの発展を支えてきたりとか、あと職人さんとか。要領のいい学力上位者って、基本的に卑怯で要領がいいことを学ぶわけですよ。数学でも要領よく解いたほうが良いみたいな技を学習すると東大によく入るんですけど、それは愚直な職人氣質とはまた真逆で、要するに同じことを何度も愚直に繰り返しているうちに、だんだんものが見えてくるっていう世界が実は職人の世界にはあるわけで、そこからは遠いわけですね、成績の良い人っていうのは。だからある意味違う教育を施すことによって新たな、プラスへと持っていけるような教育に変えていけば、いいんじゃないかなと思います。

だいたい、オタクと呼ばれている人は引きこもりでですね、たぶん家に帰って漫画描いたりとか、いろいろやっている。そういう人たちがオタク世界を支えていますから。ある部分日本の社会っていうのは、海外に出て行くような文化っていうのは、むしろ成績下位者が支えているかと思うんで、学校でもそういうものを伸ばすような特色のある私立っていうものを作れば、また別の未来が開けてくるんじゃないかと思います。

だから全てがくだらない東大に受かるようなシステムの上に乗っているというふうに思わない方が、本来の意味の教育、しかもそういう人たちが力を出してまた税金を

納めてくれれば国も県も潤うわけで。うちの子供は、東大合格者上位の高校に通っているんですけど、「大学なんか行かなくて早く働け」っていうふうにはずっと言ってます。

だから、あんまり勉強しなくてたぶん浪人すると思いますが……。だから、全てが東大を中心にしたつまらない学問っていう形じゃないような、多様な教育内容っていうものを目指した方がいいんじゃないか。要するに、そういう方向を目指したい人は目指せば良いと思うんですけど、そうじゃない人はそうじゃない未来が確実にあるんで、むしろ、そっちの方が世の中に役に立つ世界だったりするんで、私立もそういう特色を目指していく、まあ公立でもそういう学校ができるといいと思いますけど、1つの方向に向かないような学校の姿っていうのが私立に求められていると思います。

<大村知事>

ありがとうございました。江川さんの息子さんが進学校にいるというのは初めて知りました。言ってることとやってることが違うんじゃないかと（笑）。

<漫画家 江川達也氏>

俺は反対してるの。反対してるのに、東大なんか行ったら駄目だって言ってるのに、東大を目指してるの。早く職人になれって。漫画家は職人ですから。

<大村知事>

江川さんみたいに税金をたくさん納める人は、早く東京から名古屋に引っ越してもらいたいと思いますけど（笑）。

<愛知教育大学 松田正久氏>

人がどこで伸びるかというのはよく分からないところがあって、大化けする人もいれば、愚直にやっぴろんな技を持ってすばらしい生き方をする人もいるし、あるいは東大出ても悪いことやる人はいるわけで、そういうことも含めて人間の生き方は多様だということを理解しないと、なかなかその人その人の人生は語れないと思うんです。

そういう中で、僕は前回も教育全体の底上げを図る必要があるんじゃないかと言いました。例えば15ページを見ていただきますと愛知県の進学率が出ており、公私が協議の上、計画進学率が93%とありますが、この星印の1を見ると、この計画進学率をずっと愛知県は91%、92%、93%と上げてきたわけですよ。ただ2%を上げたのは昭和58年から平成9年の14、15年で間で2%上げているんですよ。今、平成24年ですから、もう15年経っているんですよ。その間この計画進学率は上がらなくて、そこ

の全国順位を見てもらうと47位、46位、46位、46位とずっと下位ですよ。つまり今までは、状況が変わったから制度をこう変えますよ、あるいは人口急増期が来るからこうしますよと変えてこられたわけですが、10年、20年の未来志向で変えていく必要があります。なかなか人を育てるといのは、簡単に制度を変えればすぐ人が育ってくるものではないので、そのことを見込んで、さっきの一人ひとりの底上げをどう図っていくのかということとはとても大事だと思います。愛知県はそういう意味でいうと、前も言いましたけれども、大県ですので財政的にも全国において相対的には豊かな県だと思います。こうした状況をふまえて、どういうふうこれから中等教育、あるいは高等教育を変えていくのか、大胆な構想力でプランをおつくりいただきたい。この15年変わっていない計画進学率は一体これでいいのかどうか、もっと入りたい人が入れるような制度をどう作っていくかを考えられたほうがいいのかなどと思います。

個性化というのは、一人ひとりが特徴を持つということですが、なかなか個性を育てる教育をやるというのは大変なんですよ。けどやっぱりそれがやれる県の一つでもありますし、そういうことをぜひ検討をいただければと思います。必ずしも計画進学率を上げれば、確かに実際には93%だけれど、全日制と高専を併せて90%と3%下がってますからね。私学の方は毎年欠員が2千人。2千人というと定員の10%くらいが埋まっていないという経営的な問題がありますので、そのあたりはちゃんと協議をされて解消しないと、さっき中野さんの方からあった統合・廃止等になってしまう。

それから、さっきおっしゃった逆転現象がありまして、低所得者の人が私学に行って、高所得者あるいは通常の人、この点、白石さん資料のその他のところにもありますけれども、低所得者の生徒数の割合は公立で低く、私立で高いという逆転現象、つまりお金のかかるところに低所得者が行っているという、そうした矛盾を深刻な問題と捉えて、行政の方でもどう解決すればいいかということをお考えいただきたい。やはりこのままだと減らないし、教育の底上げという形がなかなか図れない。一人ひとりがきちんとした基礎教育を受けて社会で生きていけるような力を身につけさせるための高校教育ですから、それをどう実現していくかということでご検討をいただければ大変ありがたいと思います。様々な観点から、ある種の検討をされて、大胆な見直しをよろしくお願ひしたいと思います。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

私が座長を務める会議において、複合選抜の入試の改革は入試の改革として、今進めており、いろいろ多くの意見をいただきながらこれからまとめていくわけです。これはやります。ただ、今述べている公立私立のあり方、これは入試とは直接関係ないことで、学校や大学など愛知県全体の教育のあり方と関わってきますので、全部はこ

ちらで関われない領域があるので、そのことだけはご了承いただきたいと思います。

先ほどからアクションプランについて言われていますが、本来は、私学はある面では助成をもらうんだけど、自分たちでやりたいことをやるという精神で来ていると私は判断しています。ただ公立は全体としての統一的ということで、プラン等である程度公共性を保ちながら進めていると認識しております。

私は能力なくても意欲があれば、公立に入れるべきだと思う。私は今そういう子どもたちがしっかり勉強やっているかということ、そうはいえないと思う。本来的にもう少し考えなきゃいけないのは、公立も私立もある程度、競争的な側面をもうちょっと入れていかないと、今の状況で、希望しなければどこへでも行けるといって、そういう状況になったら全体的な人材の損失だと思っております。

そういう点で、社会に出たら競争、これは前にも言いました。社会に出たら競争でもあります。そういう面で、入ってくる学生が高い低いとか、うちの生徒は低い子が来ていると思込むこと自身がもう影響を与えていくわけで、3年間でどう育てていくか、例えば生徒は3年間で変わるわけですよ。ですから、その変わる状況をいかに作ってあげるかということだと思えます。そのためには、先生なり教育環境なりをちゃんと整備して、その環境状況を整えていかないとやっぱり発揮できないと思っております。

いろんな面で、大学まで含めて入れるようになったと思うんです。この環境がずっと続いていくと、なんとなくまあ行ってみようという状況になっていったときにはどうなるのかと、不安の方が大きい状況を考えておまして、先ほど松田さんが個性と言われましたけども、個性は自分で発揮できなくて、周りが見い出すと言われてますよね。それはやっぱり先生の役割であり、学校の役割だと思う。私は公立でも私立でもその子の持っている能力を伸ばす努力はしているし、すべきだと思っております。そうしないとなかなか全体の底上げ図れないと思っております。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

まず、愛知県では、生徒急増期の昭和56年に公私の受入比率を2:1に設定し、公私協調により計画的な生徒受け入れを行ってきたが、今後、本格的な生徒減少期に向かう中で、どのような考え方で受け入れを行うべきかという問題です。これは、私立の定員割れの現状から、受入比率は今のままでいいのかということだと思います。配布資料の13頁に、公私の受入比率を設定している都道府県の状況がありますが、京都では北部73:21、南部54:36と比率設定しています。先ほど申しましたが、名古屋地区の比率とそれ以外の地区の比率を、別のルールで考えていかないとうまくいかないと思うので、京都の事例は参考になります。愛知県もそれくらい、都市部と地方には差があります。

次に、愛知県の高校進学率（全日制＋高専）90.1％は全国最低水準にあります。平成9年度から93％に設定している計画進学率や私学の欠員の状況等も含め、これをどうしていくべきかという問題です。高校進学率が90パーセント。これは全国最低水準であると。じゃあ、他の10パーセントはどこへ行っているのということですが、学校教育基本調査で中学校卒業者の進路を調べましたところ、愛知県では、通信制に約3千人、定時制に約1,500人行っております。愛知県の通信制課程進学者3,038名という数字は、東京の1,289名の2倍以上でありますし、神奈川の2,842名よりも多く、大阪の1,636名の倍であります。通信制課程は愛知県にたくさんあるのかというと公立で2つ、私立で3つくらいしかない。つまり、愛知県の中学卒業者が全国の通信課程に行っている。これが、私立高校の定員割れの2千人の大部分を占めているのではないかと思うと、私立に行くお金がないから、通信制にでも行くしかないということになっている。つまり、先ほどから出ている議論なんですが、中学校から高校への進学指導というのが一元的になっていて、公立でなければ高校ではないという価値観からドロップアウトする子が他の県に比べると、多いのではないかと思うのです。

あんまり他の県と比較するのはよくないと思いますが、数字的にそういうことが出ている。そのような中学校の指導があるとすれば、それを変えるためには、高校入試の問題に帰着するのではないかと思います。

高校入試につきましては、今年9月13日の朝日新聞の神奈川県版ですけれども、神奈川県は公立高校の入試が来春から特色検査として、教科横断的な知識を活用した表現力や思考力を問う筆記試験を実施するという記事が出ています。従来の試験に加えて、配点も大きくして、思考力、判断力、プレゼンテーション能力、グループ討議の評価もプラスしていくそうです。公立高校でも、今までのような入試だけではなく、新しい評価基準を推薦入試ではなく一般入試で独自に審査をする。愛知県もそのような入試になっていけば、一元的ではないわけです。これは、とりもなおさず中学校の指導方針を変えるということになると思うので、そういう高校入試のやり方っていうのも、一つ視点として持っておくべきではないかと思います。

さらに言えば、中高の接続教育がうまくいっていないのではないかという気がします。高校は中学校に、うちはこういう教育をしてこういう人材を育てますからと説明する。中学も、高校での教育について関心を持ち、対話する。多くの場合は、このような両者の対話がなくて、互いにけん制しあっているというのが現状ではないかと想像されます。学校と学校の間にはお互い利害関係があるから、なかなかそこがうまくいっていないというのは高校と大学の間にもあるんですけども、同じ愛知県の中でその接続をうまくするということが効果を出すのではないかと、という提案をしたいと思います。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

まず、いわゆる公的支援のあり方ですが、先ほどから皆さんおっしゃっているように、公費負担というのはある程度見直す必要があると思います。先ほどお話がありましたように、保護者の世帯格差が子どもの教育格差に繋がっていくのであれば、やはり、私学に対する助成の問題も見直すべきと、私は考えています。その一環として申し上げたいことが一つあります。今就職問題というところで、我々受け入れる側からの視点で考えると、今の愛知県の高校の各学科と受入サイドでいうところの、企業が求める人材、高校でどういう勉強をした生徒が欲しいかという、全くミスマッチの状況が続いておりまして、端的に言うと商業高校ですとか、普通科で就職を希望する生徒さんには、非常に求人が少ない、つまり、求人のニーズが非常に少なくて就職が厳しい。一方で、工業系の生徒さんは非常にニーズが高く、よくご存知のように愛知県内では全く不足しているので、九州、四国ですとか、他県から相当多くの生徒さんを受け入れているという状況にあるということです。

そういった面でいくと、やはり、学科の構成、多分今までは普通科、そして大学進学を希望する生徒さんが多いので、普通科を充実する方向できたと思いますが、今後の社会の基盤を作っていく人材を、どういう人をどの程度必要とするかということ、やはりある程度前提の上で高校の学科というものを考えていただきたいということです。企業の場合ですと、いろんな事業をやっていく上で、先行き縮小傾向にあるような事業については、当然リストラクチャリングの対象となる。当然そこで働いている人も再教育して、再配置して、新しい事業に転じていただくわけですが、学校の場合は、そういう視点が薄いような気がします。もちろん、商業をやってらっしゃる先生がすぐ工業を教えられるというわけではないと思うんですが、やはり学校の方もある意味産業の構造の変化に伴って、学科の見直しですとか、専門分野の変更ということを考えていただいて、社会のニーズに応じていただくということが重要ではないか。そういう面で、公立私立に対する公費負担のあり方を見直すと同時に、やはり、高校、広く言えば大学も含めてと思いますが、企業でいうところの事業構造の見直し、当然そこに働く先生方の再配置、こういったことを見据えて考えていただきたいと思えます。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

今日は前回に比べて議論らしくなっているので皆さんの意見を踏まえて色々議論したいのですが、とりあえず事務局の方からいただいている論点である生徒受入れと私学助成について意見を申し上げます。ペーパーの中で愛知方式の話題が出ておりまして、事務局のペーパーの中の19ページだったと思うのですが、愛知方式の内容について、愛知県の私学への手厚い助成ということで機能したけど現在は問題もあると書か

れています。問題があるということが認識されているのであれば、見直す必要があると思います。特に、先ほど石田先生からのペーパーの中にありましたけども、私学の経費削減の努力をすると補助金が減るという制度はあまりに妥当性を欠いていると思いますので、こういった方式がよいかはともかくとして、この問題点を改善するような方法に改める必要があると思います。

それから、計画進学率の件ですが、先ほど93パーセントからもっと上げたほうがいいというご発言がありました。なかなか難しいところがあると思います。現状の計画進学率は93パーセントを割り込んで90パーセントちょっとです。理由については先ほど谷口先生からありましたが、通信制に行ったり定時制に行ったりといったこともあると思います。計画進学率は全日制の問題なので、そこから漏れてしまっている割合が増えているわけです。実際の全日制進学率が93%に届かないと、93パーセントで計算された公立の定員がフルに充足すれば、その分私立の充足率が下がります。今日ここに来る前に計算したのですが、今の実態に合わせて計画進学率を90パーセントぐらいで計算にすると、公立がオーバーフローして。その分を私立が受けることで私学の定員も解決します。しかし単純にそれでいいかという話にするのも難しい。計画進学率を実態に合わせて引き下げるとは二つ問題点があります。一つは公立に行かせたいという保護者のニーズに対してその窓口を狭めてしまうのできつと反対が強いこと、もう一つは、私学のなかでも現状の枠の中で定員を充足している学校と未充足の学校とあって、充足している学校は現在の93パーセントでも人が集まるのに、90パーセントになると定員が減らされて収入が減り、やりたいことができなくなってしまうこと。このところは難しい話ですが、前半で申し上げましたように、この会議で公立・私立全般の話として、こうした方がいい、ああした方がいい、この部分は直そうと部分的に手当てをしようとする、必ず他の部分で綻びが出てしまうことになる。先ほど中野先生と石田先生の複合選抜についての議論の中で、入試制度と公立、私立の問題は関係があるかないかという話がありました。私はあると思いますが、やはりそういうことも含めて、全体の中で、私学の位置付けというのを考えていかなきゃいけない。やっぱり場を分けて、公私のテーマについて幅広く議論する会議が必要なんじゃないかなとは思っています。

それともう一つ、石田先生からご指摘のあったことで、税金の公平使用がありましたが、私は全くこれには賛成でして、現在、大学は国公立と私立があって、私立は授業料が高い。国立も私が行っていた当時よりは上がりましたが、ただ大学に関しては全員が全員行くわけではないので、ある程度の差があるというのは許容されると思います。しかし高校の場合ですと事実上9割以上が行くわけで、準義務教育的な色彩があるわけです。そうであるのなら、行った先が公立か私立かで税金の投入額に、生徒から見れば受益額に差をつけるというのは、時代にあってないのではと思います。

また、石田先生のご意見の中で、公立の推薦の話がありましたけれども、これは私が前回の入試制度試案でも書きましたが、公立高校、特に普通科について、学力推薦の必要性というのは全く感じない。環境推薦というのは、恵まれていない環境におかれている子たちに教育の機会を与える、公的分野として与えていく手段として必要だと思いますが、学力推薦で来る子たちは普通に入試をして選抜すればいい。その人数が、先ほど石田先生がおっしゃった、ものすごい数だったというのを私は不勉強で知らなかったですが、事実上の生徒の青田買いのような形で私学の経営を圧迫している要素になっているのであれば、これは入試制度の課題で改善する必要があると思います。

あともう一点、谷口先生の意見の中で、中学での進路指導のお話がありました。これに関しても、これは私が前回の入試制度の議論のときにいろいろな学校の先生や保護者の方、塾の先生から話を聞いたのですが、中学での進路指導というのは基本的に私学のことは考えていない。みんな公立の指導ばかりやっている。学校の先生自体がそういう指導、そういう空気感を学校全体で醸成していますから。公立進学こそが第一だと、教育現場がそうなっているのだという話を何度も聞きました。そういう問題があるならば、中学の進路指導の現場においても意識的に、公立一辺倒にならない在り方というのを考えていく必要があるのかと思います。

<大村知事>

ありがとうございました。ひとあたりご意見いただきました。ちょっとだけ、私の感じたことだけ申し上げますと、公立、私立のあり方で、さきほど谷口さんからもお話があったのですが、都市と地方の差というのは決定的なものだというふうに思います。東京は都立高校、公立の学校があるにしても、私立の方が数が多いわけですが、東京だけでなく神奈川だって埼玉、千葉だって通えますもんね。僕は碧南市というところなので周りにないんですよ。今は大分電車が早くなりましたけどね。昔は私、駅からも3キロ以上離れとってですねえ、事実上名古屋には通えないんですよ。電車で昔1時間半ぐらいかかりましたからね。今はだいぶ、名鉄も速くなりましたけど、やっぱり名古屋近辺とそれ以外というところの問題というところはあるのかなあと。現実には、私立高校の経営とかいろいろなことを考えると、現にそうですね。名古屋中心、名古屋近辺のところと、愛知県の地方の高校がなかなか生徒さんを集めるのが難しいというのは、大学もそうですからね。現実には、話をお聞きして、そういうところはあるのかなあという気がしました。そこをちょっと分けて考えられるのかは分かりませんが、決定的にその問題じゃないかという気がしましたけれど。いずれにしても感想を申し上げました。

さらにまだ時間ありますので、先生方、また、さらに付け加えることがあれば、い

かがでございましょうか。

<学校法人名古屋石田学園理事長 石田正城氏>

先ほども申し上げましたけれども、不登校の生徒ですけど、だいたい一学年に、たとえば中学校三年生、どのくらいみえると思いますか。

23年度で2,321名です。これはもう本当に大きな社会問題でして、この生徒たちがどうしているかと言いますと、県内の全日制高校へ入学した者が、全部で267名ですが、公立には100名、私立学校には167名、こういう数字なんですね。2,321名もいて、267名しか全日制に入っていない。しかも私立学校の方が多い。こういう現状なんです。それでもこの子たちはいわゆる定通制へ行って、元気にやっているんですね。その子たちが600名ぐらいいるとは思いますけれども、教育委員会の方では、進学率93%という数字にずいぶんこだわってみえますけれども、そういう生徒をカウントしたらいいと思うんですよね。

確か平成3年だと思いますが、中央教育審議会ですべての子どもたちがいるから、総合制の学校を作りなさい、あるいは単位制の学校を全日制にいなさい、こういう指導があったと思うんですね。だから、例えばそういう生徒たち、600名の昼間定時制に行っている子を全日制にカウントすれば、93%に近づいていくわけですね。中学校の先生がおっしゃって見えましたけれども、子どもたちは、いわゆる昼間定時制の学校は学校と思っていない。やっぱり子どもたちのプライドもあるわけですから、そういう今、2,300名もいるという実態からして、ぜひ考えていってほしい。もちろん、いろいろご意見がありました。私学も頑張れと。私どもも本当に頑張っています。こういう生徒も受け入れて、一生懸命育てておりますし、学力の低い者も一生懸命引き上げているわけですけども、私は、同じ土俵で、私立だけがそういう者を受け入れるのではなくて、公立も公立の役割として受け入れて、そして競争をしていくと、こういう土壌が必要だと、こういうことを申し上げていきたいと思うわけでありまして。

私立学校も定員を満たしているところもあります。知事さんもおっしゃって見ましたけれども、地域がありましてね。例えば、名古屋周辺の尾張部から、名古屋の方に毎年6千人出るんですね。名古屋市の方に6千名も行っちゃいますから、逆に名古屋市から3千人、郡部に流れるわけです。差引3千名が出る。そういうような状況の中で、やっぱり、碧南じゃないですが、高浜だとか、ああいう学校はガラガラになっちゃうわけですね。だから、これは一概にその地域にある私立学校がサボっているから集まらないじゃなくて、地域的なところ、県の教育委員会でもそのところを随分お考えになって、学級減、学級増をされてみえますけれども、もう一つ、地域の私立学校の状況を聞いていただいて、学級増減をしていただくとありがたいというふうに思っております。

< 共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏 >

先ほど中野先生から、少子化で人数が減っていく中で学校の統廃合ということも考えていかなければならないというお話があったと思いますが、これは本当にそうとおりに思うのです。生徒が減っていくことは確実なので、問題はそのやり方でして、私、このような愛知県の会議に出ているながら岐阜市民で、うちの近所に岐阜市立岐阜商業という高校があります。何年か前に岐阜市の市長さんが市岐商を立命館に売って立命館を誘致すると表明して、岐阜市は大論争になり、議員さんも交えてチャンチャンバラという大変な事態が起きました。私は近所に住んでいるというだけで別に市岐商とは格段関係はないのですが、地元にはOBの方がたくさんいて、そういう方々が地元でそれなりにちゃんとやってらっしゃって、その方たちが大変な反対をされた。学校を潰すということは、特に市岐商は伝統ある学校で甲子園も行くほどの学校ですからそうだったかもしれないですけど、なかなか容易じゃないことだと思います。ですから統廃合、統合、潰すという話をする前に、最初からルールを決めて、こういうふうになったところは学校を畳みますよというルール化をしておいて、それに引っかかったから統廃合するよというような形を作っておいた方が実際にどこをなくすかという議論をするときには、ずっとやりやすいと思います。

< 愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏 >

統廃合というのは、私はもともと地域の高校を生かす、遠くまで通うべきではないという意見です。だから地域にそれぞれ特色のある学校をつくっていく、例えば学習や学力を伸ばしたいとあって、わざわざ名古屋まで来なくてもよい、地域にそういう学校を作っていく。全体の中でどのように学校をまとめたらいかがを将来的に考えていかなければならないと思います。

先ほど、いろいろ出た中で、例えば、高校に通う途中で不登校になるとします。現に、義務教育の段階では、不登校の子どもが通う学校が公立でもでき始めているんです。高校も必要かは分かりません。ただ不登校が起こらないという状況を考えた場合、入学した学校が自分に合わなかった場合、また他のことを勉強したいと思ったとき、ある割合だけは転学できる仕組みをつくってもよいと考えています。それくらいの希望が持てれば、生徒は頑張れると思っています。

それから、昼間定時制の話が出ましたけれども、昼間定時制を第一希望にしている生徒も実際にいる。昼間定時制で仕事を持ちながらやってみたいという生徒がいるわけで、それも一つの進路ではないかと私は思っております。そういうことも考えていかなければいけないと思います。

もう一点、学力推薦については、先ほど青田買いだという話が出ましたが、学力推

薦はどここの高校もすべての学校で実施しているわけではないんです。地域ごとに高校でやっている場合もある。だから学校の事情、高校の事情に合わせて、推薦入試をやるにしても、これからどういう推薦入試を行うのか、どういうところで一番特長が出せるのかを検討しながら行わなければいけないと思います。

<漫画家 江川達也氏>

今回の議題とは少しずれるんですけど、先ほど、中野先生が個性を伸ばす教育をするとおっしゃって、それに関して異議はないんですけど、僕から見ると、個性を伸ばす教育をしていると、個性は伸びないのではないかということを感じるんです。基本的に、先生、教師になるタイプの人って、個性を消して教師になる人が多いんですよ。個性を伸ばそうとすると、個性って実は恥ずかしいものなんですよね、恐ろしく。だから、あんまり個性、個性と言われて、思っていることを表現しろと言われて、個性を伸ばそう伸ばそうとすると、なかなか個性を出せなくなる。個性を伸ばす教育をするよりも、個性をどうやって社会と適合できるようにするか考えた教育を行った方がよいと思います。個性は、放っておいてもみんなが持っているんで。

教育は、基本的に型にはめていくのが教育なんですよね、歴史的に。要は、子どもは自由な個々のパラダイムを持って生まれてくるにも関わらず、数学や算数はこういう風に考えるんだよとみたいな、難しい言葉で言うと「陶冶」って言うんですけど、今までの人類の知識を注入するというのが教育の側面なんですけど、ただ、それを入れすぎるあまり、自分らしさがなくなっていくと。教育というものはそういうものなので、教育をする側が個性を伸ばすとやってしまうと、訳がわからない状況になってしまうんで、個性を伸ばすというよりも、今の社会と個性は違うんだとはっきり分かった上で、それなら、どうしたらその個性を今の社会と適合できるのかということをつなぐことを考えたほうがよいということ。

もう一点は、どちらかといえば、先生が個性をつぶそうとした方が個性が伸びるといって、逆説的ことがあるんですね。俺は、相当個性をつぶされるだけの攻撃を受けましたが、受けた分だけ個性が出て、逆に圧力を掛けただけ個性が伸びるのではないのかという気がして……。毎回、個性を伸ばすと聞くとそういう風に思ってしまう偏屈者な漫画家です（笑）。

<愛知教育大学学長 松田正久氏>

今の少子化の中で学生たちを見ていると、挫折を知らない学生が多くなっている様に思います。いい子いい子できて、打たれ弱い。へたに叱るとパワハラということになりますし、そういう打たれ弱さを持っている学生たちです。特に国立大学の学生は、真面目なんですけど、そういう学生を大学教育の中で、どうやって変えていくかとい

うことも大きな課題です。さきほど言われた今の若い世代の底上げを図ると同時に、僕らの世代は中学を卒業して就職した人たちが50%くらいいる。高校教育も、トータルに世代間にわたって教育をするという観点から、生涯教育の観点もとても大事な視点となるので、その意味でも若い人の底上げと同時に、社会全体の活力維持のための教育をどうやっていくか。学びたいという人はたくさんいるわけで、時代変化の中で、自分の学びを再度やりたいという人がいるので、それを公開講座を開いたりというのではなくて、キチンと教育システムの中に入れ込んでいくような、そういうところで発想を変えないと、若い人はどんどん減っていくので、若い人だけでは全体の数は維持できないんで、トータルに維持できるような制度を考えることが必要だと思うんですね。

単に入試制度の問題ではなく、日本の社会のあり方、根幹の問題につながるので、そういう観点も入れながら私学経営をやっていかれると、新しいことが出てくるのではないかと、今までの議論を聞いていてそういう気がしました。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

議論の中で大阪の話が出なくて私が一言触れただけですけど、公立・私立の関係でいうと、最近での一番大きなトピックといえば、大阪がやった方式だと思います。私の立場としては、大阪方式をそのまま愛知県に持ってくるのは難しいかもしれないんですけども、その考え方、つまり、所得に応じてですが、私立も授業料についてはかなりの部分を無料にする。そして公立と同じ土俵にして競わせ、それで募集がうまくいかなかった学校、人気のなかった学校は公私を問わず退場してもらおうという方向は納得できるものだと思います。これに関して、ほかの方々に意見を表明していただければと思いますが、いかがでしょうか。

<漫画家 江川達也氏>

もう一度質問をお願いします。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

つまり大阪の橋下さんがやった、公立私立の改革。つまり、私立の高校全部無償化ですが、あれを愛知県において同じことをやるということが是か非かということです。

<大村知事>

あれはですね、トータルで私学助成は増額するんですが、所得610万円までの子どもたちの授業料に対しては、全部大阪府が面倒を見る。ただし、私立学校の経常費補助については、ばっさり切る。努力しろということですね。大阪方式は、それについ

てということです。

<漫画家 江川達也氏>

それが嫌な高校はどうなるんですか。皆従わなければならないんですか。

<大村知事>

それは、府の予算だから。府が決めて議決してしまったわけですから。

<学校法人名古屋石田学園理事長 石田正城氏>

トータルでは、変えていないんですか。

<大村知事>

予算総額は増えていると思います。金がかかると言っていましたから。

<漫画家 江川達也氏>

私立の公立化みたいなことですか。その分、何か発言が上がるということはあるんですか。

<大村知事>

そういうことはない。公立と私立の枠組みをなくして、自由に競争しろということです。

<学校法人名古屋石田学園理事長 石田正城氏>

私立の授業料は抑えられるんですよね。ここまで以上のところは助成を出しませんよという感じで。そういう意味では私立学校の実質的なところで問題はあつたわけで、考え方として全面的に理解するということはできないということかと思つた。

<漫画家 江川達也氏>

自主性は守られるんですか。

<大村知事>

ただ、授業料は上げられないの。上限を決められちゃうから。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

大阪は、それで私立に人気が出て、公立で定員割れの学校がだいぶ出たんですけれ

ども、愛知でそれをやると果たしてそうなるかはわからないですけれども。今、石田先生がおっしゃったようにそのまま持ってくるには少し乱暴なところがあるんですが、考え方としてどうかなということでお聞きしている。

<大村知事>

大阪は、やはり田舎が少ないというのがあるかもしれない。あと、私立学校が一生懸命生徒を集めたんですよ。生徒を集めた私立に生徒が集まって、府立高校は定員割ればかりになっちゃったということ。

<漫画家 江川達也氏>

ある意味、競争原理が出るのであればそちらのほうがいいと思いますけど。

<大村知事>

それをやろうとすると、さっき私が言ったように、名古屋とその他の地域とでは(差がありすぎる…)愛知県でやろうとすると、三河の方は学校がないんだよなあ。学校に通えない……

<漫画家 江川達也氏>

参加したい学校は参加して、参加したくない学校はしないきゃいいんじゃない……

<大村知事>

いろいろな議論があって、先ほどの岐阜の市立岐阜商業の話ですが、岐阜の細江市長とは国会議員のときから仲がよかったので話をすると、岐阜市立の岐阜商業でありながら、生徒の半分は市外から通ってくるんだそうで、校舎の耐震化をしなければならぬけれど、30億円以上かかる、それで良いのかと。それなら同じ学校で立命館を誘致すれば、全部立命館が負担してくれると。そのとき私は、細江さん、それは考え方は正しいと思うけれど、それを強行するとハレーションが起きるよと言ったが、結果はあのようにになりましたが。

さて、後半だいぶ意見が盛り上がったような気がしますが、やはり、公立と私立は愛知の教育の中では、車の両輪といいますか、大事なところではございますが、本日はいろいろな角度からご意見をいただきましてありがとうございます。

さて、現実に私学助成制度につきましては、色々ご意見をいただいて、私どもと私学協会の皆さんとで見直しも含めて議論してるところでございますが、今日いただいたご意見をそういった議論の中に生かしていければと思っていますし、公立と私立の役割分担、それが結局は生徒の受入れの枠組みの論点になろうかと思っておりますので、

そういったことも含めて、これからしっかり議論をしていきたいと思っています。

そういう意味では、個性を伸ばす教育、そういう点では、江川さんは愛教大でもいろいろ、いや、大学ではあまりプレッシャーはかけられなくて…。

<漫画家 江川達也氏>

大学がまたひどくて…

<大村知事>

愛教大ではだいぶ押さえ込まれて…

<漫画家 江川達也氏>

押さえ込むというよりも、そのころ流行の教育みたいなことをやっていて、それが違うんじゃないかと。個性を伸ばすという関係だと、例えば美術系の授業で、その先生は、上手い絵よりも、下手でも真面目に一生懸命描いている絵を褒めようって。

俺、漫画家になったくらいだから、めちゃくちゃ絵が上手かったんですよ。それが冷たくあしらわれて、上手い絵がなんでいけないんだみたいな (笑)。

<大村知事>

それは、その先生に逆らったんじゃないの (笑)。

<漫画家 江川達也氏>

逆らっていないですよ (笑)。人それぞれ個性があるわけで、その時の学問のパラダイムとか流行があって、それと合わないものがあるわけで、それが例えば未来のパラダイムに変わってくるんだけど。みんなそれぞれ持っているんだけど、その時流行った教育のパターンにはめ込もうとするというのが教育の限界でもあるんだけど…

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

個性化というのは、集団の中でどういう個性を伸ばすかということなんです。個性をみんな持っているんですけどね、それを社会化しなければいけない。すなわち社会で生きていくために自分がどんな能力を発揮して、何をするかを考えなければいけない。そこに個性化があるのです。

<漫画家 江川達也氏>

そうそう、そうなのに、最近、個性を伸ばそうとかといって、変に明るく個性がどうとか変わっていくから、もっと偏屈な個性を持った人がどうやって社会と成り立つ

ていくかということをつなげればいいんだけど、教師にその自覚がなくて、教師は偏屈な奴はもうだめだみたいな狭い範囲で見るんですよね。

<愛知教育大学学長 松田正久氏>

愛教大ももう変わっていますから（笑）。

<大村知事>

意見は尽きないようですが、ぜひ公立と私立両輪あいまって個性を伸ばす教育というものを・・・

<漫画家 江川達也氏>

個性を伸ばしちゃいけない、個性とどう社会と・・・

<大村知事>

今日いただいた意見は、しっかり生かしていきたいと思います。冒頭申し上げましたように今日の意見をまとめまして、県のホームページにアップしたいと思います。何とぞよろしく願います。それでは第3回は以上とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

(以 上)